

イデア原因説について

岩 岡 悠紀子

『ハイドーン』の中心テーマは、魂の不死性の証明であるが、その証明の展開をみると、プラトンの他の対話篇と同様、直線的にその目的へと進むものではないことがわかる。主な議論だけでも、哲学者の生き方・認識論を始め、想起説・さらに『ハイドーン』以後のプラトンの思想の中心ともなるべきイデア論などがあげられ、これらが魂の不死性の証明に属するような形で展開されている。従って、単に魂の不死の証明だけが、この対話篇の目的であり、最も重要な哲学的議論であるとは断言できないことになる。特に、対話篇の後半である、イデア原因説へと到る過程においては、一見、魂の不死性の証明がわきへ置かれた如く思われる位、緻密で問題点を多く含んだ議論が行なわれている。しかしながら、この部分の意図するものは何かということを取り返って見る限り、常にこの不死性のテーマと密接な関連をもっていることがわかるであろう。故に、本来ならば、この関連をぬきにしては考えられないのであるが、ここでは、その関連に立ち入らず、イデア原因説に限って論じてみようと思う。

イデア原因説は、ソクラテスの若き頃の経験である、自然研究、即ち、個々の事物の生成消滅の原因探求の結果、得られた結論といえるだろう。われわれは、現実世界で、物が腐敗したり、天体がある速度で回転したり、回帰する諸現象を見ている。また、われわれ自身も、思惟したり成長したりするし、人間の中には大きい人も小さい人もいる、ということを知っているわけである。が、一旦、それらが何によってそうなるのか、なぜそうなるのかと問われれば、ソクラテスと同様、即座に明瞭な原因を説明することができなくなるのである。たとえば、今、この場所に立っているという行為についても、行為者自身を形造っている肉や骨、皮膚などの構成部分が互いにまとまって動いているからだという説明では、何によってこの立つという行為がなされたかという問の答にはならないことが明らかである。ソクラテスの言うところの原因とは、付帯的条件としての原因ではなく、つまりそれなしには原因が原因として成立しないといったそういうものではなく、真の原因なのである。そして次に、この真の原因がアナクサゴラスの「ヌース」原因説に求められることになる。それは、簡単に言えば、万物を秩序づけ万物の原因となるものはヌースであるというものであるが、このヌースは、アナクサゴラスの現存する断片からもうかがえるように、ソクラテスの期待した、現在まさにあるあり方が最善であるよう万物を秩序づけるヌースではなかったのである。それは、空気やアイテール・

水といったもののように空間を占める物質的なものには
ぎなかった。

そこで、いわゆる第二の航海法によって、前提が立て
られる。この前提は、『美』や『善』『大』やその他
すべてそういったものが純粹にそれ自体だけである
(auto Kath' auto) というものであり、これに続いて、
もし『美そのもの』以外に何か美しいものがあるなら
ば、それが美しいのは、かの『美そのもの』(auto to
katon)にあずかる(metekhei)からであって、他のい
かなる原因によるのではない。」ということが主張される。
このような端的な形の主張を余儀なくされるのは、次の
ような事情があるからである。たとえば、あるものが美
しいことの原因として、鮮やかな色をあげるとしても、
それが唯一可能な説明ではなくて、われわれは、その色
ではなく、その形態の故に美しいと言うことも可能だか
らである。

さて、この「すべての美しいものは、『美』によって
美しい」という命題を考えてみると、一見、見事に的を
ついた命題であるから、容易に理解できそうであるが、
反面、非常に判然としないという感に打たれる。なぜな
ら、原因として言われた「美そのもの」も、イデアによ
ってそうあらしめさせられているという「すべての美し
いもの」も、両者はそれぞれいかなるものなのか、又、
一方が他方の原因があるというその関係の仕方はいかな
るものなのか、これらの疑問は、対話篇のこの部分に關す

する限り、これ以上明確に述べられていないからである。
そこで、まず、イデアについて考えてみたいと思う。

「すべての美しいものは『美』によって美しい」という
命題においては、『美しい』という述語は、『美そのも
の』によって」というイデア論の主張を含んでいる。ここ
にいうイデアとは、単にわれわれの精神の内にあるよう
なものとか、単なる普遍者や論理的有ではなくて、イデ
アは個物に臨在し、個物はイデアを共有していると言わ
れることから考えて、イデアは正に存在する実在であり、
神的不死なるもの、知性の対象となるもので、単一な
形相をもち、分解を受け入れず、常に自己自身のあり方
を変えない恒常的な存在であり、ただ精神の思惟によっ
てのみとらえられるものである。ということが出来る。
これに対し、個物は、人間的で死すべきもの・雑多なか
たちをとり、知性にかかわりのないもの・分解されるべ
き運命にあり、片時も自己自身のあり方を恒常に保たな
い存在であって、触覚・視覚等その他の感覚で感じとれ
るものということが出来る。

そして、このようなイデアと個物が、イデアの側から
いえば、「イデアが個物に臨在 (partusia)」し、個物
の側からいえば「個物がイデアを共有する (koinonia)」
という関係になっている。

ところで、これらの表現が厳密にはどういうことかは、
この対話篇では、これ以上説明されていない。それには、
様々の理由が考えられるが、最も有力な理由としては、

この前提は、生成及び消滅の原因を求めるために立てられたものだから、その生成消滅の原因は何か、に答えることが第一に必要なことだったと考えられるのではないだろうか。

ところで、この前提の意味は、「美」のイデアは、美しい事柄の端的な原因であるというのではなく、「事物が美しくあること」の原因であるということである。なぜなら、ソクラテスのあげるイデアの例をみても、「美」とか『善』『正義』『敬虔』『等しさ』『大』など道徳的価値や美的価値・数学的諸性質や関係について言われたるもの・性質的なものであって、決して「人間そのもの」「馬そのもの」とかいった第一実体的なものではないからである。また、個物についても、「一般にかの真実在と同じ名をもって呼ばれる事物」と言われているように、美しいと言われるその人間や馬・上着などが問題なのではなく、これら具体的事物をかくならしめている諸性質の名で、美しいものとか等しいものとか呼ばれているかぎりのものが問題になっているからである。

このように、個々の事物の生成消滅とは、イデアにあらずかる場合は生成、イデアを失う場合は消滅、ということになる。

そこで、最後に、果してこのイデア原因説が生成消滅の原理として十分なものでどうかを簡単ではあるが、検討してみたいと思う。というのは、後に、アリストテレスが『「パイドーン」』におけるソクラテス」と題して、

このイデア原因説が不十分なものであると指摘しているからである。つまり、もし、イデアが真に原因だとするならば、イデアは常に絶えず生成させずに、時として生成させたりさせなかったりするのとはなぜなのか。なぜなら、イデアもイデアにあずかるものも、常に存在しているのだから、というものである。そしてさらに、健康そのものや知識そのものがそれらにあずかるものと同様に存在しているのに、医者が健康を植えつけたり、知識ある者が知識を植えつけたりする場合には、イデアとは別の原因があるのではないかと、言っている。即ち、『「パイドーン」』のソクラテス誠には、始動因が考えられないというのである。また、「メタフィジカ」でも、プラトンはただ二種の原因だけを、即ち形相因と質料因を万物の原因として求めたと言われている。確かに、イデア原因説を生成消滅の原因とみなし、これに始動因・目的因を要求し、明確な説明を求めれば、その通りかもしれない。しかし、われわれは、そうとは簡単に断言できないのである。なぜなら、われわれは先に、イデア原因説が、ものがなぜ美しくあるのかという問に対する答であるということを見た。従って、イデア原因説の命題においては、プラトンは、始動因・目的因を明確に述べようという意図がなかったのではないかと思われるのである。というのは、対話篇全体の中では、その目的因・始動因にあたる言葉がソクラテスによって語られているからである。その箇所は、ソクラテスの自然探究の過程に

おける98A以下で「つまり、太陽や月などひとつひとつの天体が活動を行なったり、他から力を及ぼされたりするのは、なぜより善いことなのかをたずねようと決心した。なぜなら、アナクサゴラスが、これら天体に秩序を与えたのは知性であると主張するからには、現在のあり方が最善なのだということ以外の原因をそれらに与えるとは考えられなかったからだ。」という箇所と、99C以下の「善というひとつの適正な力こそが真に万物を結びつけ、統合するということを」という箇所である。故に、『パイドーン』のソクラテスは、目的因・始動因を全く見逃しているとは言いが切れないことになるのである。

この点については、ロスの見解が妥当だと思う。つまり、ロスの見解は、次のようなものである。「『パイドーン』においてさえ、始動因と目的因は無視されていない。始動因は、ソクラテスがアナクサゴラスのヌース原因説を物理的なもので、原因が端的な諸条件と区別されていないと批判している箇所で見られる。このヌースの概念は、世界の現在があるがままの存在の始動因として考えられており、ヌースがそのために働くという目的因としては、善なるものが考えられている。プラトンが、絵や彫刻など様々の事物について、それらが、そういった事物を作る人以外によって生じなかったり、良き行為がその行為者以外の人によって行なわれなかったりするということを考えなかったはずがない。 というの

である。また、この他に、ハックフォースは、アリストテレスが『パイドーン』のソクラテスの考えとして批判しているのは、端的な生成即ち実体の生成の説明についてなのか、ある意味での生成即ち性質の生成の説明についてなのか、はっきりしないと述べている。なぜなら、先にみたように、プラトンが言っているのは、生成はイデアにあずかることによる、ということから後者なので、アリストテレスの批判はあたらないのである。アリストテレスのあげる健康や知識の例は、技術による生成だからである。

さて、ソクラテスの自然究明は、一応の解決を見たことになるが、そのソクラテス自身も非常に細かな分析的議論を行なった後、語っているのは、「たとえあの『ものそのもの』が実在するという第一前提が君たちに信じられるとしても、それでもなお、もっと緻密な探究が必要ならなければならない。」ということである。確かに、イデア原因説後半の議論をみても、述語づけの問題や内在的性質、またこの対話篇ではほとんど議論されていないが、数学的諸対象となる数学的有など、これらをその議論の内でもどう解釈するのか、わかりにくい点が多いのである。だが、ここでは最初にも書いたように、本論からもそれ、スペースも許されないので、以上で終えることにしよう。